地域およびその認識の風景を考えるためのノート

佐々木　葉

フェロー会員　早稲田大学教授　創造理工部社会環境工学科（〒169-8555 東京都新宿区大久保 3-4-1）
E-mail: yoh@waseda.jp

流域治水をはじめ持続的な地域のためには大地に対する統合的な計画がもとめられる．一方パンデミック化で急激にオンラインによるリモートコミュニケーションが進み，場所と時間の断片化が進む．これらを地域および地域認識の課題として捉え，景観および風景という観点から考えていくための手がかりをつかみたい．そのため本稿は地域および地域認識に関わる研究をすすめる際の視座を整理した上で，西研による本質観取，ヘスターによるエコロジカル・デモクラシーを参照し，アクチュアリティのある個人的体験を大切にしたアプローチを確認した．

Key Words: *地域認識, 地域景観, 体験, 本質観取, エコロジカル・デモクラシー*

1.　地域認識とは

地域景観，地域認識，そして地域景観認識というキーワードのもとに，これまでいくつかの論考を試みてきた．これらに対して研究発表の場において，地域認識とはなにか，地域も認識もふくめて定義がなされていない，という指摘を何度か受けた．これへの回答はいままできちんとできていない．本稿は，まずこの問いに向き合うことを出発点としている．

同時に，地域に対する大きく二つの，しかも真逆のような二つの課題が現在大きく目の前にあるなかで，景観や風景は何かの手がかりとなるのか，という問いからも本稿は出発している．課題の一つは，度重なる豪雨災害をうけた流域治水概念をはじめとして，グリーンインフラ，エコシティ，あるいはコンパクトシティなど，地域のサスティナビリティを目指す空間計画において，地形をはじめとした大地の連続的な広がりの上での土地利用やインフラ計画を統合的に考えていかなければならない，という課題である．そこでは流域，微地形，地下水，生態系など，所与の大地に横たわる秩序と特性がまずスタート地点となる．さらには，そうした特性のもとに展開してきた伝統的，歴史的 built environment に見られる特性も加えられる．自ずとこれらは連続的で距離と時間をワープさせない空間的地域であり，こうした地域の計画やデザインについてはマクハーグ [1]をはじめとして先例はあるものの，こと日本において実装可能な手法の探究はまだまだ未開拓である注(1).

今一つの地域に訪れた課題とは，すでに高速移動手段を手にした 20 世紀に始まり，情報化が進んだ時点で加速していたものが，今般のパンデミックへの対策としてオンラインによるリモートコミュニケーションが一気に日常化するという形でもたらされ，場所およびその関係性が激変した，しつつある，ということである．この変化がどのような課題として見据えられるかすらまだ定まらないが，距離と時間が不連続なまま接続する状態が日常化した地域に，私たちは現在生きている．アフターコロナ，ウィズコロナなどとよばれる文脈のなかで，新しい社会の形としての地域を再考するならば，どのような話ができるだろうか．

そして，仮にここで前者を大地の地域（の課題），後者をオンラインの地域（の課題）と呼ぶとするならば，これらを景観や風景によって考えていくには，今どのようなアプローチがあり得るのだろうか．計画やデザインという技術をもって地域の課題を解決しようとするというミッションを視線の先に据えながら，今一度，地域および地域認識に関する研究をすすめる際の視座を自己確認的に整理しておきたい．これが本稿の意図である．

そのため，まず自らが地域（景観）認識に対してどのような問題意識やアプローチで関わってきたのかを振り返り（2 章），ついで「地域認識」に関する既存研究を踏まえて改めて地域と地域認識への視座を述べ（3 章），本質観取とエコロジカル・デモクラシーという二つの大きな知から得た示唆をノートする(4 章).

2. 地域景観に関する自身の研究の振り返り

まず自身の研究室にて取り組んできた地域景観，地域認識に関わる研究を振り返る．

(1) 空間的地域系—主体系という軸の設定

2011 年の「地域景観の議論のためのメモランダム」[2]は，地域計画の一種である景観計画，つまり景観という観点をとりいれることで，地域計画はどのような可能性を広げられるのかという問題意識から始まる．イメージアビリティの高い地域をつくる，地域環境の備える質の一つとして景観を位置付ける，あるいは，地域の理解と興味関心，知的好奇心とその結果うまれる保全という意志がその意義といえるのではないかと想定しつつ，ひとまず地域景観とは，そもそもどのように捉えられているのかをレビューした．その結果，空間としての地域に寄ったものと，体験，認識する主体に寄ったものという軸の上に，既存研究を 4 分類した(図-1)．その上で地域景観研究のアイディアとして以下の 4 点をあげている．1)移動によって認識可能となる地域をとらえるために身体を主体と環境のリアルな呼応の媒体として位置付ける，2) 地域景観の認識には複数のレイヤーがありそうだからそれを救いとる方法を考える，3)より良い計画として，環境と人の暮らしの動的な調整を総合的にとりこんだ地域計画に景観という観点からアプローチする．4)地域景観を平易で直感的で愛らしく記述する，である．

なおこの論考の注において，一応地域について触れている．それは「対象地の状態が都市的であるか非都市的であるかを不問としてある規模以上の面的広がりを総じて地域と呼ぶ」というもので，都市と農村の対立が無くなって以降の非都市的領域を地域と呼ぶときの地域ではない，という記述上の説明にすぎず，実質的に地域とは何かについては何も定義していない．

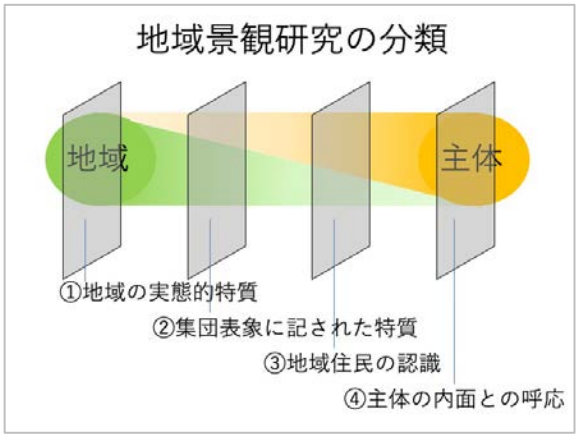


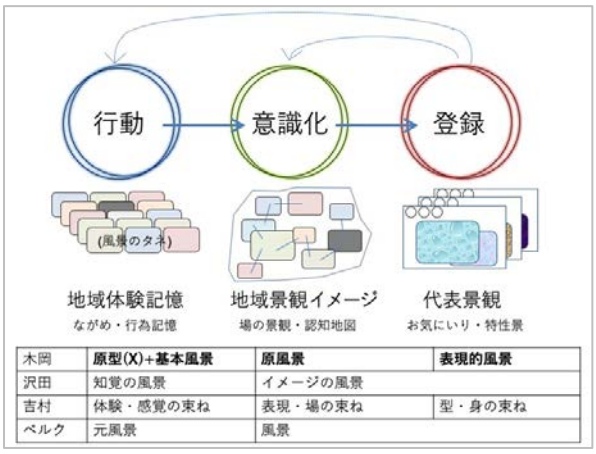
図-1 地域景観研究の分類 [3]中の図-1

(2) 主体へのダイブ

その翌年「私の風景の日常性と地域景観認識モデル」[3]では，景観計画などに反映する景観とは，ワークショップなどで語られるわかりやすい地域資源の眺めだけでよいのかという疑問とともに，そもそも個々人の日常的な眺めがどのように地域の景観として認識されていくのかを，ベルク，木岡，沢田，吉村の既存の理論を参考にしながら作業仮説的にモデル化した．それは地域における行動によって体験される「地域体験記憶」が何らかのきっかけや要請によって意識化されて「地域景観イメージ」となり，さらに意識化の反復などを通じて登録された「代表景観」となる，というものだ(図-2)．こうした動的な生成プロセスとして地域景観をとらえることで，WS などを通じて得られた情報の解釈も変わるであろうし，計画において景観を考えることの意味も進化できるのではないか，と考えた．その上で地域景観研究の課題を提示したが，それはどのようにその情報を捉えるかという調査研究手法上の課題であり，地域景観そのものをどのような角度から論じていくかには至っていない．

並行して，藤沢 2012「風景の多元性に着目した地域認識に関する研究」[4]では，特定しやすい，あるいは共有しやすい景観資源を持たない地域の景観計画の手がかりは，という問いから始まり，美しいなどの評価から切り離した個人個人が自分の中だけに思い描く風景に注目した．これをローカル鉄道の車窓風景からの写真撮影実験を通して分析し，個人の中でも，また主体の属性ごとにも異なる複数の風景体験の仕方があることを示した．こうした風景の多元性から，見た目としての眺めに止まらない風景の意味に近づき，絵画的な認識とは異なる地域での体験の蓄積から生成される地域の見方によって断片的な眺めがある枠組みの中に位置付けられていく，というロジックが浮かび上がってきた．

これらではいずれも，私という個人がどう眺め，どう認識するかにこだわること，またそのことの意味を考えようとしたものであった．



木岡	原型(X)+基本風景	原風景	表現的風景
沢田	知覚の風景	イメージの風景	
吉村	体験・感覚の束ね	表現・場の束ね	型・身の束ね
ベルク	元風景	風景	

図-2 地域景観認識モデルと既往の知見の対応 [3]中の図-1 に着色

また，高野 2008「風景と場所の識別に関わる認識と都市空間構造との関係性」[5]や藤井 2012「プロトコル分析を用いた地域イメージの想起プロセスに関する研究」[6]では，定位や投錨というキーワードがあり，地域の中で自分はここにいるという感覚およびそれによる心の安息に注目した上での研究である．その背景としては，空間の均質化と同時に進む断片化や囲い込み，さらにはモバイルに依存した体験（経路の省略）の常態化によって，ここにいるという実感と安心感やその蓄積としての地域イメージの形成ができづらくなっているのではないか，という危機感がある．

⑶ 実践とのつながりのなかで

(2)の研究は，場所自体および人々の関心がともに断片化し，地域に生きる実感を感じづらい現代において，日常的な体験を通じてえられる風景を通して地域に根差したという感覚をどうすれば醸成できるか，という問題意識があり，同時に実践している具体的な景観計画の策定にそのことをどう組み込んでいけるのか，という現実的な課題として考えていた．

そのため佐々木・長谷川 2010「地域景観認識の媒体としての絵図」[7]では，恵那市景観まちづくりの一環として作成した地域絵図を紹介し，絵図の有する特質とそれを景観計画などで利用することの可能性を考え，また西村 2015「地域認識の把握手法に関する研究レビュー」[8]によって，既存の調査手法にヒントを求めた．地域を何として把握するかについては，領域，風景，地域資源，印象やイメージがあり，認識する主体については，その属性の違いに焦点を置くものと置かないものがあるとともに，文学などの表象に還元された主体としてとらえるものがあるといった整理がされたものの，大雑把に言ってしまえば，みんなそれぞれ苦労していて，体系化された手法を見出すことは難しかった．

⑷ 空間的地域の読み解き

以上のように地域を主体がどのように認識しているかを，主体から得るデータに基づいて論じるだけでなく，地域側に語らせる，地域の空間構造から読み取れる特性から考えていけないか，という文脈のもとで試みてきたのが，スペース・シンタックス(SS)や歴史的景観キャラクタライゼーション(HLC)という空間分析手法を用いた研究である．SS については高野が研究を進め [9][10]，地域の空間構造であると同時に活動（移動・交通）の指標としても読み取ることができるこの分析手法を，地形という所与の空間条件の上に，素直にから強引にまで様々な程度で人為が作り上げてきた都市，地域の特性およびその生成メカニズムを理解しようとしてきた．一方 HLC については宮脇による手法を踏襲しながら道路と土地利用の不変化分析という手順を踏んで，なんとなく感じられる歴史性を面的に特定し，それを景観計画にも反映することができた [11][注(2)]．さらに SS の分析結果に対して HLC を適用することで，空間的な不変化と活動状態の不変化とを対照させることが，地域の現在の状態つまり景観の理解に活かせるのではないか，ということを考えている [12]．

このような，地域空間寄りの分析，ただしその分析は人為と人意が内包された空間として分析することで，生きられた結果が空間に刻み込まれた地域の理解としての地域認識をさぐろうとしている．

3. 地域と地域認識への視座

次に，本稿の冒頭で述べた出発点，すなわち地域も認識もその定義が示されていない，という指摘に答えるために地域認識を扱った研究をレビューした．安易な方法ではあるが J-stage などの検索サイトで「地域認識」を検索語としてみると，予想以上に抽出される論文は少ない．得られた手がかりから興味をもったものについて述べる．

⑴ 土木計画学分野

地域認識をキーワードとした検索で，かなり上位に谷口守の 2 篇の論文 [13][14]が現れた．1995,1996 年に一連の研究としてなされたもので，認識に基づく地域と実際の地域（この研究では行政区域）にはズレがあり，このズレには高速鉄道網をはじめとするインフラの影響があること，またインフラの整備効果は経済指標などの客観的に把握可能なものとは区別される心理的効果にも注目する必要があり，その一つとして人々の認識する地域に注目した研究である．1995 年の「認識に基づく地域範囲設定法とその経年変化分析への応用」[13]では，地域概念に関するレビューとして，地域（region）が土木計画学，地域経済学，地理学などでどのように定義されているかが簡潔に記されている．孫引きになるが，「地域経済学では『地域とは単に任意に区分された面域（area）ではなく，意味の有る面域である』」とされ，地理学における定義についてもまとめられているがその内容は後述する．そして，「土木計画学においては地域を分析単位とした様々な研究事例は数多いが，地域の概念や定義自体を深く掘り下げて議論することは，実際のところあまり重要視されていないのが実情である」と指摘されている．

その上で谷口は，ボーダレス社会における認識に基づく地域概念の重要性を指摘し，それを具体的かつ理論的に定義し，計測可能なデータを設定してその時間的変化も計測可能とし，インフラや地域整備が認識に基づく地域に与える影響を把握することを試みている．当該論文

ではその場所をどう呼ぶかという地名（呼称）に認識が表れているとして地域定義の指標とし，具体的には電話帳に記載された事業所の名称に用いられた地名の選択率をデータとしている．

谷口の研究から四半世紀が経つが，その後土木計画学分野における地域の定義や地域認識に関する研究が進展した様子は残念ながら見出せない．

⑵ 文化地理学における地域概念

谷口の論文でも参照されていた地理学における地域の定義を確認しておく．まず教科書的には，地表面の現象を地域的に把握する際の類型として，等質地域，機能地域，認知地域の 3 つがある [15]．等質地域は一つないしは複数の特質を共有する地域（例：話す言語によってドイツ語地域，フランス語地域などとするもの），機能地域は政治的，行政的，経済的，社会的，文化的に機能するように組織された領域（行政域はその典型），認知地域は人々が頭のなかに持つ地域とされるが，イメージマップのような領域の広がりだけでなく，関東や関西に対する意識などもふくまれる．これら 3 つの概念を内包した Blotevogel による 3 地域概念として，実質地域・認知地域・活動地域がある [16]．

実質地域とは客観的な地域であり，地形や土地利用，社会地区のまとまりとしての等質地域と，通勤や経済関係などの結合関係の空間的まとまりである結節地域および機能地域からなる．認知地域は，自宅や職場というアンカーを中心に生活行動が生み出すメンタルマップ的な地域にアイデンティティや地域観をもふくめ，空間的イメージにみられる個人や社会集団の主観的な構造的まとまりとされる．最後の活動地域は，社会が空間（地域という空間的構造のまとまり）をつくる側面（例えば都市計画や市場開拓）に関するもの，とされている．なお文化地理学においては，こうした地域概念と並列して，環境と景観が地理学への視点として位置付けられている．このように位置づけられた地域（並びに環境や景観）に対して，様々なデータを各自の興味と関心のもとで使いながら，地上に展開している文化現象を，発見し，説明・解釈し，応用していくことが地理学研究の手順とされている [15]．

次に地域認識を検索語として抽出された地理学分野における論文については，地域をどのように伝えるか，特に地理学教育の文脈で地域の何をどのような観点から教えるかについて，思想や価値観が反映される事柄でもあり，その点にも注目した議論の中で地域の認識が扱われていた [17][18]．また地域の特色を理解するという意味で地域認識という語が用いられている [19]．

⑶ 分級の対象としての地域

地域をどのように捉えるかの諸論のなかで興味をもったものに，地域分級という概念がある．これは地形や植生といった所与の空間条件をうまく利用して，保全をふくむ効率的な土地利用を目指すという眼差しのもとで行われる地域を区分する技術である．武内和彦による論考を見ておこう [20]．1982 年に発表されたこの論文において，土地利用計画調整システム化手法のような新しい学際的分級論が活発になっているとされている．そのなかで武内は異なる観点から行われる土地の分級を統合した，地域としての分級という概念を提唱している．そのなかで地域を，土地と経営（土地利用）が一体化した実態として定義することで，地域分級が可能となるとし，さらにはこの地域の概念はヨーロッパの景域（Landshaft）を意識しているとする．地域分級とは，「地域区分によって区分された地域を何らかの価値判断によって質的・量的に序列化して等級区分すること」であり，地域計画やその下位概念である土地利用計画のための地域診断に使えるとする．地域および地域分級をこのように捉えた上で，地域の単位性，地域の単位の階層構造について論じており，その基本的考え方は景観生態学に通じている．こうした地域分級においては，主体による認識が入り込む余地がないように思われるが，武内は，地域分級は主体（地域住民）を疎外せず，むしろ主体の地域認識の中にこそ分級の基準が潜んでいる，とする．過去あるいは現在の土地利用とは，従来の土地利用に関わる技術体系のもとで土地を地域住民が評価した結果であるが故に，地域分級の前提とするべきと主張する．また景域(Landshaft)としての地域については，井手の論 [21][22]を忘れるわけにはいかず，また武内や井出をふまえて日本における景域の計画として求められることについては横張が簡潔にまとめている [23]．これらも含めて武内の地域分級論は，冒頭に述べたいま眼前にある二つの課題のうちの大地の地域を具体的に考える際に改めて参照したい．

⑷ 地域および地域認識とは

以上極めて限られたレビューからひとまずわかることをまとめた上で，私なりの地域と地域認識の概念を整理する．まず地域認識という語は必ずしもテクニカルタームとして広く使われてはおらず，文脈によって様々な意味を持つものであった．その中で地理学においては，地域をとらえる際の類型の一つとして，客観的に把握可能な実質地域に対峙されるイメージとしてのまとまりであるとされる．こうした地理学における地域のとらえ方は，実質地域を景域としてとらえてその保全や計画をおこなうための地域分級や景観生態学にも通じる点があり，その具体的な区分すなわちある種の評価の基準の一つとして参照されるものに地域住民の認識が位置付けられている．

これらの既存概念が示唆するところは，地域の概念と地域認識の概念は独立したものではなく，地域をどのように捉えるかによって，地域認識という概念が成立するかどうかが決まる，ということではないだろうか．つまり完全に主体を排除した物理的な地形や地質の側面からだけ地域を論じる場合には，地域認識という概念は意味をなさない，ということである．

以上から，私なりの地域と地域認識とはなにかを定義する．まず地域とは，大地（地形，土壌，植生，水循環，気象・気候，生態などを含めたもので水面も含む）とその上での人の営みとしてある土地利用の状態およびそれによって生じる活動を包括した面的ひろがり，とする．マクロには自然と人為，空間と行動がインタラクティブに展開している面的広がり，である．これらの内容（農的か都市的かなど）は問わず，また広がりのサイズも問わない．しかしサイズに関しては，一つの建築敷地や街区程度では，これらのインタラクションが生じづらいために，地域としてとらえることは難しい[注(3)]．このように，地域を相互に関係する複数の事象の統合としてとらえた上で，地域認識とは，その統合的な事象を主体がその主体なりに理解したもの，とする．そのため主体によって，どの事象に注目するか，事象間の関係をどう把握するかは様々であり，地域の理解としての地域認識のかたちは異なる．異なり方には，注目対象の違いといった異なり方もあれば，その範囲の広さ狭さや関係性の理解の程度によって，浅い認識と深い認識と呼び得る違いがあると考える．

(5) 地域・認識と景観・風景

このように，地域と地域認識の概念を確認した上で，景観や風景がこれらにどう関わってくるかを考える．地域は地理学でいう実質地域として，その状態を客観的にとらえることができる．その際の指標としては標高データとしての地形，植生分類，土地利用分類，経済指標，人々の行動，など様々あるが，眺めとしての景観を複数の指標が内包された総合的な指標として位置付ける．これは地理学的な景観概念でもある．これに対して地域認識は主体の理解であるから，言語や認知地図などのデータとして捉えうるが，主体の理解のかたちの一つとして眺めとして理解するということがあり得ると考える．眼前の地理学的景観がほぼそのまま理解のかたちとなる場合もあれば，強調や省略，時空を異にする眺めのオーバーラップなどの編集が行われた眺めとして理解されることもあるであろう．つまり景観を，主体のなかにある統合的で複雑な理解の直観的認識の形として位置付ける．以上を言い換えれば，地域としての景観と地域認識としての景観（景観と風景の言葉の使い分けをするならば，地域認識としての風景とすることが語感として落ち着くので，以降地域認識としての風景とする）である．このような位置づけのもとで，地域および地域認識の議論において景観や風景からアプローチすることが私の立ち位置である．

よって 2 章で振り返ったこれまでの研究を確認するならば，(1)は地域としての景観と地域認識としての風景の研究例を分類し，(2)は地域認識としての風景の構造を考え，(3)は両者の記述，調査手法を模索し，(4)では地域としての景観を主体による認識の基準を内包した指標によって記述しようとしたものであった．

4. 地域を考えるための手がかりとして

3 章までで，ひとまず地域および地域認識，そしてそれらと景観，風景についての確認作業ができた．それを踏まえて，冒頭に示した二つの課題，「大地の地域」と「オンラインの地域」を考えていくための手がかりを探してみたい．

(1) 課題とそれへの向かい方

大地の地域の課題は地域としての景観から，オンラインの地域は地域認識としての風景からそれぞれ考えていくことができる．それぞれに対するなんらかの処方箋を探していった上で両者をつなぐこともちろん必要だが，ここでは，大地の地域とオンラインの地域の関係から考えてみる．

オンラインの地域は，地理学における認識地域であり，これと実質地域のズレは今にはじまったことではない．ケビン・リンチをはじめとして 1960 年代のポスモダン都市論において意味やイメージが注目され，実質地域でなく認識地域をベースにした計画やデザインが重視される．しかしスプロールの進展や行き過ぎたズレによって場所性が喪失していくと，認識の面からは愛着やアイデンティティの回復を求め，地域の面からは環境負荷やインフラ維持などへの問題からコンパクトシティに代表される地域形態の再編がもとめられる．そして 2010 年代から空間的つながりとは基本的に独立可能な情報ネットワークを基盤とした社会が本格的に現れ，society5.0 や自動運転を視野に入れた地域の議論も出現した．その渦中でパンデミックがもたらした移動の蒸発は，身近な地域へのまなざしとともに，時間と空間の断片化をもたらした．

移動の蒸発によって生まれた時間のゆとりは，近所の散歩に始まり，身近な自然の変化への注目，近隣資源の確認など，まちづくり的には好ましい行動と意識の変化をもたらしたといえよう．その一方でオンラインコミュニケーションは，相手のいる場所の情報を時に積極的遮

断もしくは制限する．そして用が終われば瞬時に自分の空間と時間に立ち戻る．この感覚は，飛躍を恐れずに言えば，他者のいる地域の認識としての風景の解体を招く．

こうした状況下において，身近な地域への関心をいかに大地の地域への関心に広げていくか，そしてそこで育まれる大地の地域を風景として認識する力を，オンラインの地域にも援用し，断片化つまり書き割りになってしまう風景に対しても，地域認識として一定の深さをもった風景にしていくことができるようにしたい．そのためにはどうすればよいか．ひとまずこうした問いを立て，そこに示唆を与える手がかりを探してみたい．

⑵西研による本質観取

手がかりの一つ目は，哲学者西による本質観取である．西は「私たちの生きている社会は，急速に「あたりまえの生き方」が崩れていった社会である」という認識のもとに，自己および他者の了解，これを通してよりよき生き方と社会をめざすことを哲学の目的とし，そのための哲学の方法として現象学的還元と本質観取を位置付け，実践している[24]．またこのことを直接的に風景の問題として山田とともに論じ，生命の抜け殻としての景観ではなく，やっぱり風景は大切だ，という風景の人間的意味の次元に遡って考えることの必要性を説いている[25]．

こうした西の仕事を，上述の問いの手がかりとする主な理由は，そこには，自己の体験というアクチュアリティを伴う感覚に向き合う，他者をもう一人の私として捉える，共有しうる理念は育てることができる，といった点を見出すことができるためである．以下に西の説く哲学の方法を確認し[26]，それを地域認識としての風景に展開してみたい．

現象学的方法

フッサールに対する西の解読と補完によって我々の手に届けられる哲学の方法は，現象学的還元と本質観取の2段構えを通して，ある種の体験に共通する「一般的な構図」，つまり本質を取り出そうとする．現象とは「一人称の」意識体験すなわち私の意識体験であり，その体験しているという感覚を自らしっかり見据えること（反省）することで，その体験は疑うことのできない「（体験）反省的エヴィデンス」となり，科学の方法論としても信頼可能な対象となる．そのように位置付けられる現象のあり方を，その意識体験の場に内在しつつ捉えようとすることが現象学的還元とされる．外界に関係なく自身の体験に意識をむけてそれと向き合うことと理解する．これは，日常の行為のなかで様々に目にする眺めの記憶に意識を向けて，そのありありとした感覚に浸る，ということをも含むであろう．つまり人は体験を言葉のみを通して思い浮かべるのではなく，その時の眺め，音，風や体の感覚という言語化せずともありありと感じられるものとして向き合うからである．つまり地域としての景観と向き合う（反省する）ことで，地域認識としての風景が生成されていくための地域体験記憶（風景のタネ）を反省的エヴィデンスとして信頼可能なものとすることができる，と考える[注(4)]．

ついで本質観取とは，複数の人々の体験からなる反省的エヴィデンスに基づいて体験の一般的構図を取り出すことをいう．極めて個人的な体験をもとにしながらも，そこに共有可能な何かを見出すことができるのは，本質観取は「問い」によって導かれ，その問いにふさわしい仕方で，どんな人の体験世界にも共通な構造を取り出そうとする，「必要かつ信頼しうる共通了解」を作り出す努力，であるからだ．決して体験を持ち寄って話し合えば本質がでてくる，というオートマチックなものではない．その上で，本質観取が可能となるのは，現象学とは，他者の体験も私の体験の変容態としてみようとする努力の上になりたつものであり，他者は，さまざまな異なった条件のなかを生きる「もう一人の私」だという基本スタンスをとるためである．

地域認識としての風景と本質観取

以上のような本質観取は，地域認識としての風景を考えるための示唆となる．西の方法をはなれて，勝手に展開してみる．まず本質観取は，極めて個人的な体験から出発するため，その体験自体に予め公共性や共有性，代表性は求めない．私にとってアクチュアルな体験をさらに反省してその体験の感じに浸る．ついでそれぞれがそのようにして得た体験を持ち寄り，確かめ合うことで，自分にはなかった見方，場所，そしてそこでの体験に触れる．それは自身の体験を再度見つめ直すこと，気づくことにつながる．異なる視点，視線から体験された眺めが立体的になり，像としては2次元であっても，その山の向こうにはなにがあり，この川の水はどこへ流れていき，かつてここは田んぼであり，この角であの事故が起き，といった書き割りではない眺めとして立ち現れてくるのではないか．大地の地域を考えるためには，こうした視覚像として美しいかにどうかにかかわらない奥行きのあるアクチュアルな眺めとしての地域認識を育てていくことが必要であり，それは個人的な体験と，他者のそれの確かめ合いから近づいていける[注(5)]．

次に，確かめ合いを通じても得られる，さまざまな異なった条件のなかを生きる「もう一人の私」としての他者という感覚．ここから，自分が生きている時間と空間が断片化された日常の感覚が，他者のいるそこにもあるのではないか，という想像に至る．オンラインミーティングが終わった瞬間の時空がわずかにぶれるような感覚は，画面から消えたあの人にも漂っているのだ．そういった想像力は，画面の切り取られた映像を，見えないけれど確かに存在する温度をもったリアルな体験が生起す

る場として意識する志向性を刺激する．このような意識化をすることが，大地の地域とオンラインの地域に対して，その認識の風景を育てることにつながるのではないだろうか．

しかし，こうした意識化は自然と起きるものではない．西は本質観取が行われるような公共的な議論の空間が必要であると言う．自由に発言できる信頼に支えられた場が想像されるが，本稿の関心からは，本質観取の対象となる体験が自ずと日常のなかで蓄積され，それについて話をすることが地域の本質に迫ることができそうな眺めが得られる場所や空間，として展開してみたい．では地域の中からそこをどのようにして見つけ出せばよいのか．

⑵ エコロジカル・デモクラシーのデザイン

その問いへの示唆はまずは中村良夫先生の特性景にもとめられる[27]．主に地形と土地利用の空間的関係が，ある視点からの眺めに特徴的に現れることがあり，それを特性景という．地域認識としての風景を形成する代表的な地域としての景観といえよう．しかしこの概念だけでは，大地の景観の議論を切り開くのは難しい．そこでここではランドルフ・T・ヘスターによる「エコロジカル・デモクラシー」[28]に，より具体的な手がかりを求めてみたい．

ランドスケープデザイナーであり，コミュニティデザイナーであるヘスターは，社会と生態系を同時に考えることで現代の都市の課題を解決する，そのためのデザインの理念，原則，方法，具体的指標を体系化した．可能にする形態，回復できる形態，推進する形態の３部にそれぞれ 5 つの原則が示されている(図-3)．本書の訳者である土肥によって，エコデモと略称されるこの本の内容を，広め，実践していくために財団が作られ，パンデミックの影響下でどのような新しい都市を目指すかのための積極的な議論も展開されている[29]．

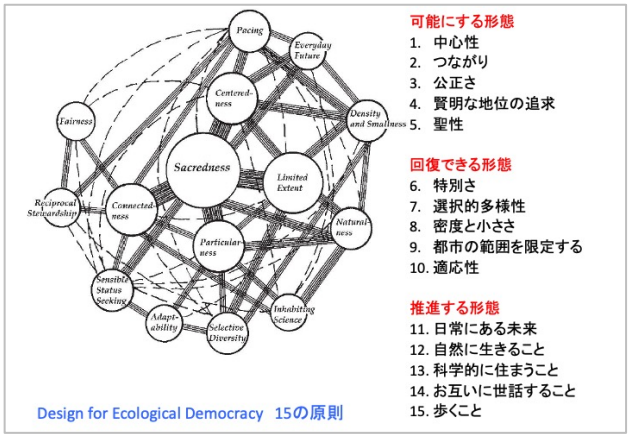


図-3 エコデモのデザインの 15 の原則[図は28)より]

デザインの実践によって蓄積された具体のデザインのためのガイドとなる本書は，地域分析を直接の目的とはしない．しかしここに示された原則にそって議論ができそうな場所を探してみることで，本質観取の対象となる体験を支える具体の場所や空間（のデザイン）を得られるのではないかと考えた．特に大地の地域の議論を活発にすることを目指して．

そのような興味から改めて本書の目次を眺めると，15 の原則に散りばめられた都市，ランドスケープ，空間，場所への目の付け所はいずれも示唆に富み，選定が難しいが，今後の思考の手がかりとして以下の 4 つの原則に注目した．

日常にある未来 Everyday Future

原則の名称がそのまま手がかりになる．日常にある未来とは，日々の生活や経験に根ざした生命力あふれるアイディア，と定義される．人々の日常生活の中にすでに懐胎されている未来を意識し，デザインする．この原則のもとに示される事例やデザイン戦略は，徹底的に人々の毎日の繰り返しのパターンを見つめ，そこに結果が返されていく．大地の地域と直接つながるようなスケール，トピックではなく，時に対立する人々の行動，日常生活のパターン，そしてそれらコミュニティにとってアクチュアルな体験の積み重ねであるところのパターンに潜む大切なものにリーチし，それをデザインと行動によって未来につながる新しい形として日常に挿入していくのだ．この章からは，外からはそう簡単には見えない日常生活のパターンという本質の存在と，そこには地域を構成する多様な側面が凝縮した体験が見出せる，ということを学んだ．

特別さ Particularness

特別さは，マクロからミクロまで，大地が有する固有の特徴を十分に読み込んだ土地の知恵に基づいて作られた伝統的な都市や建築に学び，さらにそれを新しい形へデザインすることで，回復できる形態を実現するための原則である．こうしたアプローチは大地の地域の議論において重要であると多くの人が認めるだろう．バイオリージョンの特徴を地形図などの助けも借りて読み解き，災害に対応してきた伝統的な知恵の形態を集めていく．しかしこれら特にマクロな特徴はなかなか見えづらく，人々の体験として必ずしもアクチュアルではない．その時，この章の中で唐突に思える二つのエピソードと事例が地域の特別さの本質に近づく体験の意外性を示唆する．そのエピソードとはルビーおばさんと言う地域の明らかに変わり者の行動とハルプリンという卓越したデザイナーが瞑想を通じてその地の特性を看取する，というものだ．またその地の伝統的な建築物に全く違う場所での土地の知恵を挿入することで，新しい土地の知恵となる形にたどり着いた事例である．全く異なる文脈での体験が，なんらかのきっかけ，プロセス，時間をへて，予想外の本質の形に開花する．多種多様な分析結果の関係性分析

から地域特性を浮かび上がらせるプロセスとは異なる道である．曲解が過ぎるかもしれないが，人間の，個人の直観力を信じた本質へのアプローチもあって良く，ミクロスケールの身近な環境への関心が，突然に大地の地域の景観につながる可能性も模索したい．

科学的に住まうこと Inhabiting Science

都市を本当に理解する，都市の中の自分の場所を知る，都市を形作る決定に関わる方法を知る，こうした理解の重要性（と現代におけるその喪失）を指摘することから始まるこの原則は，大地の地域の認識をいかに進めるかに対して示唆的である．土地の知恵と科学が結びつくことの必要性，知ることと感じることの両方の必要性，経験することと教育をうけることの必要性，こうした相互補完のなかで対象を本当に理解することが徐々にできてくる．一方，本質観取においては，誰かによってまとめられた論などは排除し，自分の体験から始める．その意味ではこの原則における科学への関心はあてはまらないようにおもえる．しかしこの両者は物理的な環境（の体験）から直接的に学べるのであり，そのようなランドスケープのデザインの重要性が語られる．つまりある種のランドスケープの体験からその都市，地域の理解が育まれるのであり，その体験の反省は大地の地域の認識を深めると考えられる．エコデモではそうした環境を発見する，耕す，教育する，科学的，論争を呼ぶランドスケープとして提示している．こうした視点から，学びの場となる対象を探してみることができるかもしれない．

聖性 Sacredness

聖性は，エコデモの中でも最も中心的な原則とされるとともに，最も難解な原則である．そして本質観取を考えた頭で読み直すと，まさにエコデモの目指す世界の本質として語られているように読める．実際，聖性は私たちの本質を表す，とされる．したがって，地域の本質に迫ることができそうな眺めが得られる場所や空間を探すことは，地域における聖なる場所とその構造を見出すことと一致しよう．なお聖なる場所とは宗教的であるか否かにかかわらない，しかし犠牲を払ってでも大切にしたいと感じる場所で，極めて日常的で些細で，特段美しくはない場所も含まれる．そしてそれらは個人的に思い浮かべられるものであって，共有されているかは多くの場合わかっていない．それゆえにその可視化が重要となる．エコデモのなかではマンテオというまちにおいて，聖なる場所とその構造がどのように発見され，それが具体的にどのようなもので，まちづくりにつながっていったかの事例が丁寧に語られている．それは確かに感動的である．と同時に，現在そのような聖なる場所を発見することができるだろうかと不安にもなる．マンテオの話は1970 年代から 80 年代のことなのである．地域が人を育み，人が地域を育むという循環構造のなかで，潜在している聖性を観取するには時すでに遅く，救い上げられるべき聖性の本質を意識的に作り出していかなければならないのではないか，と．聖なる場所が現代にない，というよりも，体験にむきあって聖性を観取するという志向がおのずと育まれるような日常の体験の機会を見出すことが難しいのではないか．ノスタルジックに古き良き時代を復活させるのではなく，かといってシンプルにいい場所を作りつづけるだけでなく，ロジックと直観のアマルガムとしてのアクチュアルな体験に向きあい，反省する体力と精神力を涵養するような日常を，パンデミック下に生じた身近な環境への関心のなかに探すことも考えたい．

⑶ノートのおわりに

結局のところ本稿は，私は何を考えていこうとしているのか．それを自分で確認するためのノートなのだが，書き終えてみれば辻褄の合わない部分が見えてきた．地域の景観とは何かが，今一つはっきりしない．ひとまず地域および地域認識を定義したものの，単に言葉にしてみただけで，それを記述する手法は棚上げのままだ．大地の地域とオンラインの地域という課題も定式化されてはいない．これらのことにこれから少しずつ取り組んでいけば良いことがわかった．いずれにしてもこのノートによって，私のアクチュアルな体験としての風景をより大切にしていこう，という気持ちが確認できた．音も光も走り書きの言葉も，正面から取り組むエヴィデンスである．あるいは私の意図が読み取れないような地形図を，あまたの私の日常の体験の場であり結果であるとみることで，そこから声が聞こえ，風景が立ち現れるだろう．そういうことを楽しみながらコツコツとやっていきたい．

補注

(1) 地形をはじめとする大地の特性とその上で展開されてきた施設や空間の形とその使い手の知恵などを統合的に捉えた概念のもとに地域の統合的計画を考えることを，水に注目して展開する研究課題を「地域水系基盤(生業や暮らしを支え，地域文化や社会規範を形成してきた川・湖沼・用水・湧水などの水を資 源とした社会基盤の総称)」というコンセプトのもとにここ数年仲間とともに構想している．2019 年早稲田大学特定課題研究「地域水系基盤の再生・強化のための計画・デザイン手法の共創的構築」など．

(2) これらの研究については一部ポスター発表をしたのみにとどまっている．なるべく早く外部発表したい．

(3) 集落調査などの経験から大字の単位を一つの最小サイズの目安とすることができるだろう．千年村プロジェクト http://mille-vill.org/メインページ

(4) このことは景観研究の方法として質的研究について考えていた昨年の論考（「景観研究の方法を考える」景観・デザイン研究講演集No.15,2019）をすこし前に進めてくれた．参照した西の論考は質的研究というテーマの著書におさめられており，EBM(Evidence Based Medicine)が常態である環境にあっていかに現象学を科学とするかを主張することが意図されている．それゆえ，「（体験）反省的エヴィデンス」は「経験科学的エヴィデンス」と区別されたものであり，テクストというデータでもないと述べている(文献 26)p.124)．このことは，眺めの体験として私の中に現れてくるものそのものを，研究におけるエヴィデンスとして扱って良いのだ，というエールとなる．もちろんそのデータ化という問題は残っているが．

(5) 他者との確かめ合いを一人でやってみる，一人本質観取的なことは考えられないだろうか．つまり一人で地域をあちこち歩き回り，いろいろな場所から気分を変えて眺める．さっき見えたあれはこれだったのか．さっきいたあそこはここなのか．移動によって得られる様々な眺めとしての地域の体験を自ら確かめ合うことで見え方は変わってくる．

参考文献

1) イアン・マクハーグ：デザイン・ウィズ・ネイチャー，集文社，1994
2) 佐々木葉：地域景観の議論のためのメモランダム, 景観・デザイン研究講演集, No.7, pp.160-165, 2011
3) 佐々木葉：私の風景の日常性と地域景観認識モデル, 景観・デザイン研究講演集,No.8,pp.149-155, 2012
4) 藤澤奈緒，佐々木葉：風景の多元性に着目した地域認識に関する研究 -鉄道の車窓風景を対象とした写真投影法実験を用いて-, 景観・デザイン研究講演集 No.8, pp. 52-58,2012
5) 高野裕作，佐々木葉：風景と場所の識別に関わる認識と都市空間構造との関係性, 景観・デザイン研究講演集 No.4, pp.222-228, 2008
6) 藤井元希,佐々木葉: プロトコル分析を用いた地域イメージの想起プロセスに関する研究, 景観・デザイン研究講演集 No.8, pp. 46-51,2012
7) 佐々木葉，長谷川智也：地域景観認識の表現媒体としての絵図ー岐阜県恵那市での試みからー, 景観・デザイン研究講演集 No.6, pp. 238-244, 2010
8) 西村奏絵，佐々木葉：地域認識の把握手法に関する研究レビュー, 土木計画学研究・講演集,Vol.51, 359, pp.1-7, 2015
9) 高野裕作，佐々木葉:街路パターンの位相幾何学的および形態的指標による地区特性分析に関する基礎的研究，都市計画論文集，46 巻，3 号，p. 661-666，2011
10) 髙野 裕作，佐々木 葉:街路の形態的特性に基づく媒介中心性と形成年代との関係性に関する研究，土木学会論文集 D3(土木計画学)，74 巻，3 号，p. 183-192，2018
11) 宮田村：宮田村景観計画, 2017.4
12) 土田栞・佐々木葉：市街地の「空間的奥行きの履歴」に着目した景観特性把握手法に関する研究, 土木学会論文集 D1（景観・デザイン）, (11p), 2020　掲載見込み
13) 谷口守・ 荒木俊輔: 認識に基づく地域範囲設定法とその経年的分析への応用，土木学会論文集，No.524/IV-29, pp.59-67,1995
14) 谷口守・ 荒木俊輔:地名命名行為に着目した認識上での地域間競争とその要因分析, 土木計画学研究・論文集, No.13, pp.225-232, 1996
15) 中川正・森正人・神田孝治：文化地理学ガイダンス, ナカニシヤ出版, 2006
16) 藤井正：大都市圏における構造変化研究の動向と課題―地理学における多核化・郊外の自立化の議論を中心に，日本都市社会学年報 25 , pp.37-50
17) 北川 建次: 地理学と地理教育 : 地域認識の在り方をめぐって(第一部,社会科研究 第 30 号記念論叢), 社会科研究, 30, pp.42-52, 1982
18) 山崎 富男:地理学の地理教育 : 研究課題整理のためのノート,経済地理学年報, 27(1): pp.56-64, 1981
19) 児玉 修:地理授業と地域認識の育成, 社会科教育論叢, 37, pp.81-90, 1990
20) 武内 和彦: 地域分級論の基礎概念, 農村計画学会誌, 1(2), pp.10-15, 1982
21) 井手久登・武内和彦:自然立地的土地利用計画, 東京大学出版会,1985
22) 井手久登・武内和彦: 景域単位区分の手法に関する考察; 滋賀県新旭町における潜在自然植生と地形の対応について,造園雑誌, 38(3), pp.2-15, 1974,
23) 横張 真・ 栗田 英治: 緑地計画における欧米計画概念の導入とその今日的な展開方向, 農村計画学会誌, 30(2), pp.143-146, 2011
24) 西研：哲学は対話するープラトン，フッサールの〈共通了解をつくる方法〉, 筑摩書房,2019
25) 山田圭一郎・西研：風景の人間的意味を考えるー「なつかしさ」を手がかりに，中村良夫・鳥越皓之・早稲田大学公共政策研究所編, 風景とローカルガバナンスー春の小川はなぜ失われたのか, 早稲田大学出版部, 2014, 第 6 章,pp211-245
26) 西研：人間科学と本質観取, 小林隆児・西研編著, 人間科学におけるエヴィデンスとは何かー現象学と実践をつなぐ，新曜社, 2015, 第 3 章,pp.119-186
27) 中村良夫，新体系土木工学 58 都市空間論，技報堂出版，1993
28) ランドルフ・T・ヘスター，土肥真人訳：エコロジカル・デモクラシー まちづくりと生態的多様性をつなぐデザイン，鹿島出版会，2018
29) エコロジカル・デモクラシー財団　https://ecodemo-fund.wixsite.com/mysite/blank-22 (2020/08/31 閲覧)